

7 マンダラの形態の歴史的変遷

森 雅秀

一 はじめに

「マンダラ」という言葉の対象は、マンダラにいかなる意味を見いだすかによって微妙に異なっている。従来の仏教図像学や仏教美術史におけるマンダラ研究では、マンダラにふくまれる仏や菩薩たちこそマンダラの主役であった。かれらがいかなる来歴をもった尊格であるのか、図像学上の特徴はどの文献を典拠としているのか、尊格相互の関係は何であるのかなどが、マンダラ研究の主流であった。しかし、近年のマンダラ研究ではマンダラは総体としてあつかわれ、とくにその形態のもつ象徴性、宗教的意義、シンボリズムを読み解こうとする傾向が強くなった。仏、菩薩、女尊、忿怒尊などの各尊についての考察よりも、彼らをいれた「容器」全

体が考察の対象となる。そして、マンダラとは「聖なる世界の縮図」であり、「マクロコスモスとミクロコスモスとの本質的同一性を悟るための補助手段」であるというテーゼが一般にうけいれられてきている。¹⁾マンダラの「中身」よりも、「容器」としてのマンダラが注目されてきたということもできる。しかし「容器」としてのマンダラ」とは具体的にはいかなる形態をもっているのか、あるいは、どの時代のマンダラの形態を問題にしているのかは必ずしも明確にされていない。多くの場合、チベットやネパールのタンカ形式のマンダラや、儀礼に用いられる砂マンダラ、あるいは日本の両界曼荼羅に代表される美術史上の遺品がイメージされているようである。

本稿では、インド密教の歴史の中で、マンダラの形態がどのように変化したかを明らかにし、「容器」としてのマンダラ」の具体的なイメージを示すことを目的とする。インドにおけるマンダラの遺品が残されていないため、マンダラのイメージを考古学的な資料に求めることはできない。マンダラ的な構造をとる仏塔などは現存しているが、マンダラの形態を知るための資料としては用いられない。日本に伝わるマンダラ、とくに金剛界と胎藏の両界マンダラはその中では例外的な存在であるが、これをインド密教のマンダラの典型と見ることは適切ではないであろう。マンダラの形態を知るためにわれわれが手にする唯一の資料は、当時の仏教徒たちが残した文献である。主要なタントラ経典や論書にはマンダラの形態に関する具体的な記述がしばしばふくまれる。これらを手がかりにしてインド密教におけるマンダラの形態の変遷をたどり、それをいくつかの点にまとめてみよう。そして、このような変遷をへても、なお一貫していたマンダラの構造上の特徴を明らかにし、それによってマンダラの形態のもつ普遍的な意味を指摘する。歴史的な変遷をたどるためには、初期密教の文献から取り上げるべきであるが、まずはじめに、インド後期密教の文献を用いてインドにおけるマンダラの完

成形態を確認し、その主要な構造を提示しておく。

二 インド後期密教のマンダラの形態

インド後期密教ではマンダラはつねにふたつのイメージをもっていた。ひとつは行者が瞑想の世界の中で作り上げた「観想上のマンダラ」(bhavyamaṇḍala)で、もうひとつは儀礼に先立って地面に描かれた「儀礼のためのマンダラ」である。後者は「描かれるマンダラ」(lekhyamaṇḍala)ともよばれ、弟子の入門儀礼であるアビシエーカ(abhiseka)や、寺院、尊像などの聖別式であるプラティシユター(pratiṣṭhā)などの重要な儀礼に先立って制作されたマンダラである。実際に作られるマンダラはつねに儀礼と結びついた存在で、儀礼のための装置なのである。ここで問題にするのも、この儀礼のためのマンダラである。

儀礼のためのマンダラが実際にどのように作られたかを簡単にみてみよう。

後期密教の代表的な学僧アバヤーカーラグプタ(Abhayakaragupta)は、儀礼のためのマンダラの理想的な形態として一種の立体マンダラを考えていた。彼の主著のひとつ『ヴァジュラーヴァリー』(Vajravali)にはつぎのような文章がふくまれている。⁽²⁾

めぐり合わせのよくない時期にはシンボル(cīma)や武器(ayudha)を「マンダラに」適宜、描く。めぐり合わせのよい時期には尊格の身体を表現する。すなわち絵画、鑄像、浮き彫り、塑像を「マンダラ上に」安置せよ(99.4)。

さらに彼はナーガブッディ (Nagabuddhi) の著作やタントラ經典から類似の文章を引用し、自説を補強する⁽³⁾。少なくともこれらの文献の成立した時代には尊像を實際に描いたり、彫像や塑像を安置してマンダラを作ったことを、これらの記述は示唆している⁽⁴⁾。ただし、いずれの場合も立体的に表現されるのは尊格であり、彼らをおさめる容器としてのマンダラは平面的に表現されていたと考えられる。

儀礼のためのマンダラのもっとも一般的な形態は、顔料を用いて地面の上に各尊のシンボルを描いたマンダラであろう。アバヤーカラグプタが儀礼のためのマンダラを「描かれるマンダラ」とよんでいるのはそのためである。また儀礼のためのマンダラは状況に応じてかなり柔軟にその形態を変えたマンダラであったようである。『ヴァジュラーヴァリー』にふくまれるジュニャーナダーキニー・マンダラ (Jñānādākinīmandala) の説明の箇所には、つぎのような文章もあらわれる。

観想上のマンダラの場合、ジュニャーナダーキニー以下の「各尊の座である」二重蓮華は、順に五匹の獅子、白象、七宝の山、水牛、八大龍王の尾、四人の死体にのる。描かれるマンダラの場合、めぐり合わせがよくなければこのようには描かない。あるいは手間がかかるのを嫌がったり、施主が簡単なものを好む場合「描かないこともある」。あるいは吉祥なプラサーダ (prasāda: 儀式のあとに配分する残饌) のために、施主の力量に応じて描かれることもある。このように、これ以降のマンダラの場合にも、描くか描かないかは適宜、考察せよ (100. 4)。

マンダラは白、黄、赤、緑、黒の五色の顔料を用いて制作された。顔料の素材には鉱物（あるいは宝石）、土、穀物の粉、花、煉瓦、石灰、骨の粉が『ヴァジュラーヴァリー』にはあげられている (98. 3)。このうち鉱物が用いられるのが理想的であったのであろう。各色の原料名もそれぞれ示されている。すなわち、月長石 (candrakanta)、『水晶 (karkatana)、『ルビー (padmaraga)、『エメラルド (marakata)、『ラピスラズリ (indranila) の五種類、あるいは真珠 (mukta)、『金 (kanaka)、『るんじ (pravāla) などあげられる。その他の材料は、花をのぞいて、それぞれ準備段階で色がつけられたと考えられる。またいずれの素材を用いたとしても、素材のちがいがマンダラの形態にまで影響をおよぼすことはなかった。

『ヴァジュラーヴァリー』に説かれる儀礼のためのマンダラの形態については、すでに別のところ (森 1992) で述べたことがあるので、ここでは簡単に要点をまとめておこう。

儀礼のためのマンダラ、いいかえれば地面に描かれた彩色マンダラ (rajomandala) は、大きく三つの部分にわかれる。マンダラ全体をつつむ外周部とマンダラの神々が住む楼閣 (kutigarā)、『そして楼閣の内部である内陣である。『ヴァジュラーヴァリー』には二六種類のマンダラが説かれている。おそらくアバヤーカラグプタの時代に流布していた代表的なマンダラが選ばれているのであろう。二六種のマンダラで、それぞれ異なる形態をもつのは楼閣内部の内陣のみである。外周部と楼閣の構造はすべてのマンダラに共通で、各区画の配色も同じであるため、まとめて説明されている。ただし、最後に説かれる時輪マンダラは外周部と楼閣部分も独自の形態をもち、配色の方法も他のマンダラとは異なる。そのためアバヤーカラグプタは『ヴァジュラーヴァリー』での記述の順序として、時輪以外のすべてのマンダラの説明を終えたあとで、時輪マンダラのみを詳しく説明している。もつとも時輪マンダラがそれ以外のマンダラとは異なった形態をもつといっても、それは

楼閣の一部の構造が独特であったり、配色方法が異なるという程度で、マンダラが外周部、楼閣、そして内陣の三つの部分から構成されていることにはかわりはない。

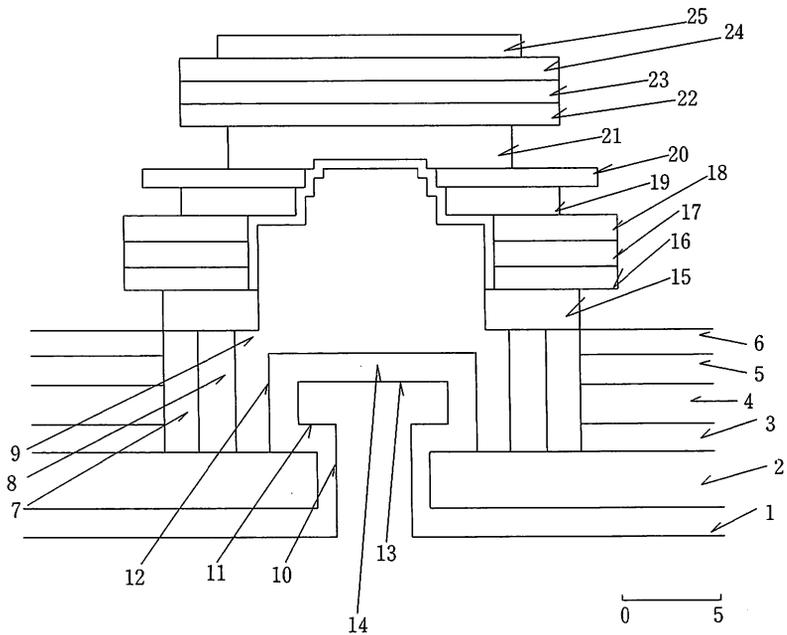
時輪マンダラ以外の二五種類のマンダラに共通する形態を中心に、マンダラの構造を紹介しよう。

マンダラの外周部は火炎輪、金剛杵輪、蓮弁の三つの層からなる。このうち火炎輪は残りのふたつの区画の二倍の幅をもっている。いずれも名称に応じた文様、すなわち火炎、金剛杵、蓮華の花弁が描かれる。

楼閣は複雑な構造をもつ(図1)。四方には門が開かれ、その上部にはトーラナがそびえる。マンダラは立体的な構造を平面的に表現しているため、トーラナは楼閣の外側に描かれる。楼閣の周壁は五つの層にわかれ、それぞれが名称をもつ。門は凸をさかさにしたような形で表現され、その各辺にも名称が与えられている。トーラナについては、アバヤーカラグプタは三種のタイプをあげているが、いずれも水平の十一の層から構成されている。第三のタイプのトーラナは、はじめのふたつに比べると三分の一の高さしかないが、やはり十一の層からなり、しかも各層の名称は第二の説と同じである。

内陣はマンダラごとにことなるが、いくつかのパターンにまとめることができる⁽⁶⁾。

ひとつは、正方形の楼閣の内部に円を描き、これを縦二本、横二本の平行な四本の帯によって九つの区画にわけたものである。円は二重の帯からなり、外側の帯が火炎輪、内側の帯が金剛杵輪とよばれる。外周部の外側のふたつの区画と同じ名称である。九つの区画は「内室」(kośha)とよばれ、内室の仕切のように見える井桁の線は「柱」(stambha)あるいは「金剛の柱」(vajrastambha)とよばれる。柱には各角を象徴するシンボル、たとえば東であれば法輪、南には宝を描くようにアバヤーカラグプタは指示している。九つの区画からなるこのような形態は、日本の金剛界マンダラにおいても見られ、われわれにもなじみ深いものである。



(Skt)	(Tib)	(Skt)	(Tib)
1. rajas	tshon	15. suvarṇa	gser
2. vedī	stegs bu	16. bakūlā	rin po che'i shar bu
3. ratna	rin po che	17. ratna	rin po che
4. hārārdhahāra	dra ba dra phyed	18. khura	rmig pa
5. bakūlī	rgya phubs	19. andhakāra	mun po
6. kramaśīrṣa	mda' yab	20. varāṇḍa	varāṇḍa
7. añcala	dar dpyangs	21. andhakāra	mun pa
8. stambha	ka ba	22. bakūlā	rin po che'i shar bu
9. antarāla	bar	23. ratna	rin po che
10. niryūha	sgo khyud	24. khura	rmig pa
11. kapola	'gram	25. kramaśīrṣa	mda' yad
12. pakṣa	loge		
13. śilisūcaka	gdung mtshon par byed pa		
14. skandha	ya babs		

図1 楼閣の外壁、門、トーラナ (単位はメートル)

インド後期密教の多くのマンダラが、構造上は金剛界マンダラの影響下にあったため、『ヴァジュラーヴァリ』のマンダラの中にもこの形態をもつものは多い。『秘密集会タントラ』(Guhyasamajatantra)にもとづくはじめのふたつのマンダラや、ジュニャーナダーキニー・マンダラ、ブータダーマラ・マンダラなどが相当する。

第二のパターンとして車輪状のモチーフがあげられる。代表的なのはサンヴァラ・マンダラである。身口意を象徴した三つの八輻輪を同心円状に組み合わせて作られている。中心には八弁の蓮華もおかれている。他にもブツダカパーラ・マンダラや悪趣清浄マンダラも車輪状の内陣をもつ。

サンヴァラ・マンダラでは車輪の中心に蓮華がおかれたが、蓮華のみが描かれているものも多い。その場合も蓮華を囲むように金剛杵をつらねた円が描かれる。八弁の蓮華の花芯に中尊をおき、四方と四隅の八弁には眷族を配する。ヘーヴァジュラを中尊とするマンダラや、その流れをくむヘルカ系のマンダラはこのパターンをとる。

『ヴァジュラーヴァリ』の二六種のマンダラのいくつかには、楼閣の内部にさらに複数の楼閣がおかれる。たとえば文殊金剛マンダラ(第二〇番)には第二、第三の楼閣が全体の楼閣の内部におかれ、トールナがない点をのぞけば、外側の楼閣と同じ構造をとる。法界語自在マンダラ(第二一番)も同様である。これとは別に、いわゆる「都部マンダラ」とよばれるタイプのマンダラもある。同じ大きさの五つ、あるいは六つの小さな楼閣を全体の楼閣の内部に幾何学的に配する(第二四、二五番)。いずれの場合も内部の楼閣の形態は、上述のパターンのいずれかに一致し、これを複数组み合わせた構造をとっているにすぎない。

三 タントラ文献に説かれるマンダラの形態

1 初期・中期密教

初期密教や中期密教のマンダラについては梅尾祥雲氏の『曼荼羅の研究』(1927)が先駆的な業績であるが、その後、大山(1962)などが散見されるほかはまとまった研究はなされていない。ここでも梅尾氏の研究に多くをよっている。

菩提流志訳の『不空縹索神変真言経』(大正蔵 第一〇九二番 第二〇巻 三二二頁上)には、原初的なマンダラの描写がみられる。これによればマンダラの全体は五ハスタ (Fasta: 一ハスタは約四〇〜五〇センチメートル)の直径をもつ円で、その四方には門がある。「内院」と「外院」という用語があらわれ、内院には八葉で七宝をそなえた蓮華が描かれ、花芯と蓮弁には尊格がのる。四門があるのは外院の方で、各門のまわりにはヒンドゥー教起源の神々や護方神が描かれる。さらに内院には「蓮華鬘界」すなわち蓮華を連ねた区画が、また外院には「三叉金剛杵鬘界」と呼ばれる金剛杵の区画があると説かれている。

『大日経』(大正蔵 第八四八番)のマンダラに関する記述は断片的である。具縁品に「聖天之住处、方等有四門⁽⁸⁾」とあり(第一八巻 六頁下)、正方形で四つの門をそなえていたことがわかる。秘密漫荼羅品においても正方形であることがくりかえされ、さらにその周囲を「金剛院」が囲むと述べられている(三四頁上中)。やはり金剛杵をつらねた帯であろう。

『大日経疏』(大正蔵 第一七九六番)にいたるとかなり詳細な記述があらわれる(六四四頁下、七四七頁中、

七四九頁中)。四方におかれた門が「亞字」の形をすると説かれているが、これは外側に広がり内側がせまい門の形を示したものであろう。「秘密大漫荼羅」は四角で四門をもち、西の門は常に開かれ、出入りに用いる。また周囲には八本の大きな宝の柱をたてよと言われる。「門標」という言葉もあらわれるが、これはトローラに相当すると考えられる。

マンダラの形態は『金剛頂経』(真実撰経 *[athvasangraha]*) にいたって格段に整備される。同経にはつきのような偈頌が登場する(括弧内の数字は便宜上付した偈頌の番号)。

四角で四門、四つのトローラによって飾られる。四本の線がただしく交わり、布や花輪によって飾られる。

(1)

隅の部分すべてと、門と門扉が接するところには金剛と宝をつける。外のマンダラの線を引け。(2)

金剛の線によって計測され、八本の柱で飾られ、輪の形に似たその内側の都城 (*prita*) に入場し、(3)

金剛の柱の上のつた五つの月「輪」のマンダラをのせた中央のマンダラの「さらに」中央に仏の像を安置せよ。(4)

この中の第一偈は、第二句以降に若干変更がくわえられることがあるが、マンダラの楼閣の形態を定義する定型句として、『金剛頂経』以降のさまざまな文献に登場する。『ヴァジュラーヴァリー』にも第一句と第二句があらわれる(94c)。四角で四門をそなえることはこれまでの文献にも述べられていたが、門とともに四つのトローラを描くことがここにいたって明示されるようになる。隅の部分すべてと、門と門扉の接するところに

つけられる「金剛と宝」とは、楼閣の周壁の裝飾である。『ヴァジュラーヴァリー』にも金剛と宝にさらに半月を組み合わせた独特の文様を描く指示がある(93ヤ)。同じ偈の中にある「外のマンダラ」(bāhya-maṇḍala)という語が注目される。『ヴァジュラーヴァリー』のようなマンダラの形態を考えた場合、「外のマンダラ」とは外周部をさすとみるのが自然であるが、『金剛頂経』のこの部分は楼閣の説明に相当し、結界的な性格の強い外周部への言及は唐突な感じを受ける。つぎの偈の「その内側の都城」は輪に似た形で、さらにその中に八本の柱と五つのマンダラがあることから、八本の柱で作る井桁をつつむ円を「内側の都城」はさしていると考えられる。するとその外側にあるマンダラとは四方に門をもった四角い楼閣ということになる。これは『不空羂索真言経』の内院と外院との関係に一致している。ただし、ここでは外院の形態は正方形ではなく円であった。

「内のマンダラ」と「外のマンダラ」という語は『悪趣清浄タントラ』(Durgatiparisodhanatantra)にもあらわれる。このタントラには『九仏頂タントラ』と『清浄タントラ』のふたつの系統のテキストがあるが、その中の『九仏頂タントラ』にはつぎのような記述がふくまれる。まず『金剛頂経』に似た偈が示される。

四角で四門をそなえ、四つのトローナで飾られ、隅の部分のすべてと、門と門扉の接するところには月、日、金剛の印が飾られ、瓔珞と半瓔珞で飾られる。四本の線がただしく交わり、布や花輪で飾られる。(Skorupski 1983: 26-27)。

これにつづいて散文の形でつぎのように述べられる。

内側のマンダラ (abhyantaramandala) は八輻輪と金剛杵輪で囲まれている。その中心の上に獅子の座が、その上には月輪がある、八輻輪の輻の中心には月輪と「尊格の場」(devasthana) がある。外のマンダラの尊格の場の帯には二八の月輪がある (Skorupski 1983: 27)。

これによれば、内側のマンダラは八輻輪と金剛杵輪に囲まれた部分、すなわち、中尊の釈迦と八仏頂が位置する部分である。これに対し外のマンダラは二八の月輪がある「尊格の場の帯」をふくむ部分である。二八の月輪とは金剛壇から普賢までの尊格の位置を示すもので、いずれも楼閣の周壁のすぐ内側に相当する⁽¹¹⁾。楼閣が外のマンダラで、その中におかれた八輻輪が内のマンダラと呼ばれていることがわかる。

チベット訳テキストのみが現存する『清浄タントラ』は、もう一方の『九仏頂タントラ』よりも成立が古いと考えられている。『清浄タントラ』にもマンダラを示すつぎのような文章がふくまれる。

四角で四門をそなえ、四つのトローナをそなえる。四つの階段の帯があり、獅子、雄牛たちによって飾られる⁽¹²⁾。

これに続いて布、瓔珞、半瓔珞、花輪、鈴、払子などのさまざまな装飾品が言及されている。

金剛界マンダラの儀軌として権威をもったアーナンダガルバ (Anandagarbha) の『サルヴァヴァジュローダヤ』(Sarvajrodaya) にも外のマンダラと内のマンダラは言及されるが、これまでのものとは、その語の

対象が異なっているようである。

外のマンダラの半分が内のマンダラで、四角で四門をそなえ、ヴェーディカーで囲まれる。マンダラの中には八柱をつないで線を引け（密教聖典研究会 1987: 269-270）。

『金剛頂経』では四角で四門の定型句のあとに登場した内側のマンダラ（内側の都城）の語が、ここでは前に出され、外のマンダラの半分の大きさと説明される。四角の形態で四門をそなえているのは外マンダラではなく内側のマンダラである。内と外のマンダラが指す語が、ここでは『金剛頂経』とは一致しないことになる。しかし、アーナンダガルバはこの引用文の少しあとで、『金剛頂経』の定型句の第一偈と第二偈をそのままあげ、一貫した立場をとっていない。アーナンダガルバのこの文献には、他にもマンダラの各部分の線分の名称と長さが規定される。ここで言及される門、門扉、ヴェーディカー、五色の色地、トラーナなどは、いずれも『ヴァジュラーヴァリー』の規定に一致した長さをもっていることがわかる。

マンダラの各部分の教理的な解釈が示されている文献として、しばしば指摘されるのが『一切秘密最上名義大教王経儀軌』（大正蔵 第八八八番）である。¹²ここではマンダラは四角で、四門と四楼閣（ここではトラーナをさす）をそなえると述べられ、さらに門扉（テキストでは「禰踰賀」）、尾提¹³、半全瓔珞、七宝、華鬘、八柱などがマンダラの構成要素とされる。そしてこれらの各部分に大乘仏教的な解釈を当てはめている。

アーナンダガルバとならぶヨーガ・タントラの学匠ブダグヒヤ（Budhaguhya）には『ダルママンダラ・スートラ』（*Dharmamanjalasthra*）という、マンダラの一般論に関する著作がある（TTP, No. 4528）。梅尾

(1927: 27) においてすでにその重要性が指摘され、酒井 (1983) による全訳と解説が発表されていることもあり、インド密教のマンダラに関する基本的な文献として知られてきた。この中にもマンダラの具体的な構造に関する記述があらわれる。ブツダグヒヤはまずマンダラを勝義諦のマンダラと世俗諦のマンダラのふたつにわけ、儀礼のためのマンダラは後者の世俗諦のマンダラにふくまれる。さらに彼は世俗諦のマンダラを能依と所依にわけ、能依を樓閣とその基礎部に、所依を尊格とする。儀礼のためのマンダラを容器と尊格にわけたことになる。基礎部に関しては「五大元素の輪」と述べるにすぎないが、樓閣の部分についてはさらに細部にまで言及している。すなわち、樓閣を外、内、門、基礎の四つの部分に分割し、外はチャイトヤや都城などに似ると述べて樓閣の全体の形態を説明する。内は部族と儀礼の目的に応じて各儀軌を参照せよと述べるにとどまる。門は上下のふたつにわけて、下の部分は門(狭義の門)と門館(sgo khang)′、上の部分は階段(skas)と手すり(glang rgyab)からなる。基礎の部分は、大きさが無量で平らであると述べる。この他に樓閣の裝飾である五宝や、周壁の仕切壁(pha gus)′、四方のトーラナなどが言及されている。樓閣の中には「墻」と「火院」という記述も見られるが、これは樓閣の内陣の外周である二重の円をさしているであろう。⁽¹⁴⁾この他、トーラナの基礎(rnang)′、柱の台座(ka gdan)′、柱の梁(kha gshu)′という用語もあらわれる。

2 後期密教

『秘密集会タントラ』とその流れをくむ諸文献では、マンダラの形態はどのように説明されているのであろうか。同タントラ第四章には、マンダラの形態がどのように述べられている。

十二ハスタからなる最上の心マンダラを作れ。四角で四門をそなえた「マンダラの」四つの隅を測量せよ。その内側には完全な円 (mandala) の輪を描け。そして儀軌に示されたとおり、順序よく印 (mudra) を配置せよ (Matsunaga 1978: 14)。

『金剛頂経』にあらわれた定型句が形を変えて登場するが、マンダラの細部に関する記述はない。

聖者流の基本的文献である『五次第』(Pāñcāvatī) を見てみよう。つきは「略集次第」にふくまれる記述である。

四大元素のマンダラを集めて、金剛地の区画をもつマンダラを「観想せよ」。そこに「ブルーム」(bhūmi) 字から完成させた楼閣を観想せよ。(1)

四角で四門をそなえ、四つのトローナで飾られる。四本の線がただしく交わり、八柱で飾られる。(2)

瓔珞と半瓔珞をつけ、宝石、金剛杵、半月をそなえる。門と門扉の接するところには金剛と宝を描く。

(3)

瓶、柱、大金剛、外廊、門側、鈴、旗で飾られ、仏子などで裝飾される。(4)

この部分は観想上のマンダラの記述であるが、マンダラの形態に関する具体的な描写がふくまれている。第一偈はブツダグヒヤの言葉をかれば「基礎部」の説明で、四大と楼閣全体の観想が指示されている。第二偈は第三句までは『金剛頂経』の定型句と同じであるが、第四句には『金剛頂経』の引用文の第三偈の第四句に置

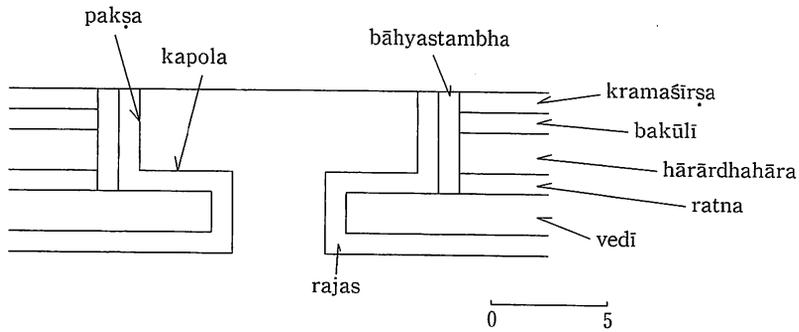


図2 ナーガブッディ所説の門

き換えられている。また第三偈の後半は『金剛頂経』の第二偈の第一句と第二句の順序を逆にしてしている。そのため、さきほど問題にした「外のマンガラ」と「内側の都城」という語はここでは登場しない。また第四偈では楼閣の裝飾品が列挙されているが、その中に外廊や門側という楼閣の一部の名称もふくまれている。¹⁶⁾

聖者流のマンガラ儀軌としては、ナーガブッディ (Nagabuddhi) の『マンガラ儀軌二十』(Maṅḍalavivṛiti) が重要である。マンガラの構造に関する規定としては、とくに門と楼閣の周壁の構造を示す箇所が引用されている。これにしたがってマンガラの楼閣の門の部分を描いてみると図2のようになる。『ヴァジュラヴァリー』の示す門の構造にくらべると、いくつかここにふくまれないものがある。門の天井のふたつの層が消え、アンチャラとよばれる楼閣の壁の端の部分もない。トラーナの柱(外の柱)が楼閣の四つの層(外廊からラジャス)に接している。この門に近い形態のものは、わが国の金剛界九会曼荼羅で、上に位置する三会(四印会、一印会、理趣会)や、敷曼荼羅にも見られる。

ジュニヤーナパードガ流のマンガラ儀軌としてはディーパンカラバドラ (Dīpankarabhādra) の『マンガラ儀軌四百五十頌』(TTP, No. 2675) が基本的な文献である。アバヤーカラグプタもこれに依拠して『ヴァジュラ

「ヴァリー」を執筆したと伝えられ、実際に『ヴァジュラーヴァリー』の中で多くの文章をここから引用している（森 1992b）。

四角で四門、四つのトーラナによって飾られる。四本の線がただしく交わり、布や花輪によって飾られる。隅の部分すべてと、門と門扉が接するところには金剛と宝をつける。外のマンダラの線をひけ。

その内側の輪 (cakra) は八つのマンダラのかたちをとり、外のマンダラの半分である。

まわりが均等な完全な円 (maṇḍala) である。輪 (cakra) と柱などを飾り、吉祥な金剛の輪によって囲まれている。⁽¹⁷⁾

第一偈と第二偈は『金剛頂経』の定型句とまったく同じである。第三偈以降は、第二偈の最後の「外のマンダラ」という語を受けて、「その内側の輪」について説明する。すなわち、外のマンダラの半分の大きさをもち、完全な円で、輪や柱によって飾られ、金剛杵輪によって囲まれていると述べる。『四百五十頌』にはこの他にも楼閣の部分や装飾品を示す語として、ヴェーディカー、尊格の帯、門の頬、門側、瓔珞、半瓔珞、太陽、月、ラジャス、旗、鈴などの語があらわれる。

『四百五十頌』にはラトナーカラシャーンティ (Ratnākaraśānti) が註釈書を著している (TTP, No. 2734)。これによって上記の引用文がいくらか理解しやすくなる。⁽¹⁸⁾ 彼は「金剛杵輪によって囲まれ」という部分について「外のマンダラの外側に金剛杵の丸い線を二本描け。内のマンダラにも同様に「描け」と説明している。さらに「火炎の輪として二重の円を描け」と続け、火炎輪が鉄圍輪 (cakravāḍa) を象徴しているのであると

いう見解を示す。この解釈はアバヤーカラグプタにもひきつがれている⁽¹⁹⁾。外のマンダラの外側と内のマンダラの周囲には、いずれも金剛杵輪と火炎輪が描かれると述べ、いちばん外側のものがマンダラの外周部に、内のマンダラの周囲のものが内陣の円周に相当する。同様の解釈はディーパンカラバドラの儀軌に対するヴィタパード (Vīṭapāda) による註 (TTP, No. 2736) にもよくみられる (Vol. 65, 211. 3. 8-4. 4)。またラトナーカラシヤンティは『金剛頂経』にもみられた「四本の線」を対角線 (mṣhams kyī thig) と理解し、「金剛と宝」を、半月にのって先が金剛杵になっている宝であると述べる。さらに「内側の輪」を飾る輪と柱については、輪、宝、蓮華、剣がそれぞれついた柱であると解説する。大日、宝生など四方の仏を象徴するシンボルが飾られる楼閣内部の柱である。

母タントラの文献を見てみよう。ここでも「四角で四門をそなえる」という規定があらわれる。『ヘーヴァジュラ・タントラ』 (*Hevajāntara*) では三箇所でマンダラの描き方が言及されるが (Snellgrove 1959: 36, 78, 82) づきに示すのはその中のひとつである。

説示者は四角で光かがやくマンダラについて述べた。

四門をそなえ、燃えさかり、瓔珞と半瓔珞で飾られる。布やさまざまな仏子をそなえ、八柱で飾られる。

金剛の線が結びつき、種々の花で飾られる。線香、灯明、香、八つの瓶などがある。

花、線香、灯明などのプージャー (pūjā) の供物が登場するが、その他の特徴はこれまでみてきたものと大きなちがいはない。この他のふたつの例もこれに類した内容である。

『サンヴァローダヤ・タントラ』(Samvarodayatantra)の第一七章にも『金剛頂経』の定型句があらわれる(Tsuda 1974: 123)。しかし、ここでは第四句の「外のマンダラを描け」という部分が「正しく精神統一したものが描け」という語に置き換えられている。母タントラ系のマンダラにしばしば表現される屍林(smasana)に関しても、マンダラの外周部に八屍林を描くという規定が、同じ第一七章の中に少し遅れて言及される。

四 マンダラの構造にみられる主要な変化

前節でとりあげた各文献にふくまれたマンダラの構造の記述と、さらにその前に概観した『ヴァジュラーヴァリー』によって規定されるマンダラをみると、マンダラの構造の変化はおもにつきの三点に集約することができる。すなわち、規模の拡大、各部分の重層化、構造の画一化である。これらの三つの点から前節の各文献の記述をもう一度まとめてみよう。

1 拡大

マンダラの規模の拡大はマンダラに外周部がくわわることによる。『ヴァジュラーヴァリー』にみられる後期密教のマンダラは、楼閣の外に外周部が存在していた。『ヴァジュラーヴァリー』がいくつかの部分で依拠した『四百五十頌』やラトナーカラシャーンティの注釈書でも同様である。ブツダグヒヤもマンダラが五大の輪と楼閣からなると述べている。母タントラ系のマンダラでは八屍林が描かれたが、これは外周部におかれて

いた。しかし、前節で取り上げた文献の多くが、マンダラの形態の規定を楼閣からはじめ、外周部にまで言及することはなかった。このことは「外のマンダラ」と「内のマンダラ」という語にも関係する。

『金剛頂経』に登場した「外のマンダラ」は、明らかに楼閣をさしていた。引用箇所だけではなく、それに続く部分でも供養女と賢劫十六尊が描かれる区画として「外のマンダラ」は二回言及されている（堀内 1983: 111-112）。外のマンダラには尊格をおくための月輪があると述べる『悪趣清浄タントラ』の記述もこれと同様である。外のマンダラに対し、その内側、すなわち楼閣の内陣は『金剛頂経』では「内側の都城」、『悪趣清浄タントラ』では「内側のマンダラ」とよばれる。後者は八輻輪と金剛杵輪とで囲まれている。『秘密集会タントラ』系の文献でも外と内の指す対象は、依然として『金剛頂経』のそれと同じである。『五次第』ではこれに対応する記述はふくまれないが、ジュニヤーナパーダ流のマンダラ儀軌である『四百五十頌』や、これに対するラトナーカラシャーンテイ、ヴィタパーダの注釈書では、明らかに楼閣を「外のマンダラ」とよんでいる。『四百五十頌』を引用する『ヴァジュラーヴァリー』においてもこれは同じである。唯一の例外としては、アーナンダガルバが楼閣を指して「内のマンダラ」とよんでいる。しかし、彼も『金剛頂経』の定型句をそのすぐあとに引用している。

実際には外周部を描きながら、その中におかれた楼閣を「外のマンダラ」と呼び続けていたという事実は、「マンダラ」という語が指す対象に外周部がふくまれていなかったことを示している。

マンダラの外周部がいつごろから登場したのかは明らかではない。日本のマンダラにないからという理由で、その後の成立であると断定するのは早計であるし、また外周部がないことを、結界を必要としない日本の風土に求めるのも疑問である。四大（あるいは五大）や須弥山をはじめに観想して、その上にマンダラの楼閣を観

想するというパターンがあれば、楼閣のまわりに外周部が存在する条件は整っている。しかし、かりに存在していたとしても、それをマンダラの一部とみなすかどうかは別の問題である。

「マンダラ」の語の指す対象が状況によってことなる用例は、『ヴァジュラーヴァリー』の中にもふくまれる。「マンダラの墨打ちの儀軌」では、マンダラの輪郭線の説明は外周部からはじめられていたが、同じ儀軌の中で「マンダラの二倍の長さで東西にわたって梵線 (brahmasūtra) をひけ」という記述もみられる (90. 5)。この場合のマンダラは楼閣を指し、その一辺の長さの二倍が梵線の長さ、すなわち外周部の直径に相当するのである。別の箇所には「守護輪の中心におかれた楼閣の中にあるマンダラ」という表現もある。この場合はマンダラは楼閣よりも小さな内陣だけをさしている (123. 4-5, 124. 3, 124. 5)。また、楼閣をさして「マンダラの家屋」とよぶ例もある。⁽²⁰⁾ はじめに分類した三つの領域、外周部、楼閣、内陣のそれぞれがマンダラとよばれる用例が存在しているのである。

2 重層化

第二の重層化は楼閣の門や周壁についてである。『ヴァジュラーヴァリー』はこの部分を構成する線や区画の名称として十四の用語を用いている。またトラーナの十一の層も、一部は重複しているが、ひとつひとつ名称をもっている。これらの名称がすべてあらわれる文献は前節で紹介したものの中にはなかった。

マンダラが四角で四門をそなえていることは、ほとんどの文献にふくまれていたため、マンダラが当初から四方にひとつずつ門があったことはじゅうぶん予測できる。しかし、その門がどのような形態をしていたかは明らかではない。門 (dvāra) とともに門扉 (niryūta) が言及されることも多いため、門が門扉をそなえて

いたことも共通して認められる。門扉は『ヴァジュラーヴァリー』の規定にしたがえば、楼閣の側面に対して垂直に描かれる二本の線で、内陣に向かって門が狭くなつたところに相当する。門扉は、『金剛頂経』以降の定型句とは無縁の『大日経』にも登場する用語である。また門の形が「亞」字のようであるというのは、『大日経疏』においてすでにみられたことから、この形に似た門が、早くから定着していたことが予想される。

この他に四つのトラーナや八本の柱も言及されることが多い。門側をふくむものもあつた。ただし、八本の柱は楼閣の内陣の柱に相当するため、車輪形のモチーフの内陣をもつマンガラでは登場しない。

璽珞と半璽珞もしばしば言及される。これは楼閣の周壁の装飾品であるが、同時にこれを描いた区画もさしている。また「金剛と宝を隅に飾れ」という規定が『金剛頂経』をはじめ多くの文献にふくまれていた。『ヴァジュラーヴァリー』の場合、これらはヴェーデーの隅に描かれる。ヴェーデーという名称は登場しないが、『金剛頂経』などでも「金剛と宝」を描くための区画が存在したはずである。この他にラジャスと外廊もいくつかの文献ではふくまれていた。『ヘーヴァジュラタントラ』では「五つのレーカー (teka: 層)」という語もあらわれた (Snellgrove 1959: 82)。楼閣の周壁がはやくから何層にもわかれていたことはたしかであろう。しかし、『ヴァジュラーヴァリー』と同じように外廊が六つの層、また門が八つの部分から構成されていたかは疑問である。むしろナーガブッディの著作にみられた、よりシンプルな構造の楼閣も長く存在していたことを考えれば、『ヴァジュラーヴァリー』のような楼閣は一種の完成形態とみなした方が自然であろう。しかも『ヴァジュラーヴァリー』そのものにもナーガブッディの型の門が紹介されていることは、用語のいくつかを共有しながらも、形態はそれぞれことなる門が並存していたことを予想させる。このことはつぎにあげる、形態の画一化とも関係する。

3 画一化

アバヤーカラグプタは『ヴァジュラーヴァリー』の中で、時輪マンダラをのぞく二五種類のマンダラを、内陣以外すべて同じ形態のものとして説明を行っている。門やトーラナに関してはいくつか別の説も紹介しているが、基本的にはすべてのマンダラが同じ形態をしていたという立場である。しかし、前節でみた文献のいくつかには、『ヴァジュラーヴァリー』にはみられないような語がふくまれていた。たとえば『悪趣清浄タントラ』によれば、楼閣は四つの門、四つのトーラナとともに四つの階段があったという。おそらく門の部分に描かれ、楼閣の外部に続く階段であろう。ブツダグヒヤの著作にも「階段」の語はふくまれ、さらに手すりや門館、柱の座などの用語も登場した。彼の念頭にあったマンダラのイメージは、『ヴァジュラーヴァリー』から復元したそれとはいささかことなっていたようである。『不空羅索神変真言経』では、楼閣の全体が四角ではなく円であった。

アバヤーカラグプタがマンダラのイメージを画一化しようとした態度は、内陣の中の八本の柱に関する彼の説明にも認められる。前にも述べたように「四角で四門」ではじまる定型句には「八本の柱で飾られる」という規定がふくまれていることがある。しかし『悪趣清浄タントラ』などのように内陣に柱がないマンダラの場合、この部分は別の文章におきかえられている。アバヤーカラグプタは『金剛頂経』などにみられた「四角で四門をそなえ、八本の柱で飾られる」という規定が、すべてのマンダラに適用されなければならない絶対的な条件であると考えて、内陣の柱という説を否定した上で、「八本の柱」とはトーラナを支える柱であるという解釈を示す(61.4)。そしてその理由として「サンヴァアラマンダラのように内陣に柱のないマンダラにもこの規定は適用されるから」と述べている。

五 何が変わらなかったか

インド密教の主要な文献にみられるマンダラの形態に関する記述を集めてみると、その記述は一樣ではなく、文献ごとに細部にちがいがあることがわかった。そして、全体のながれとしては、拡大、重層化、画一化という方向をたどり、最終的には『ヴァジュラーヴァリー』に示されたような完成形態をみるにいたる。この形態はチベット仏教においてもひきつがれ、現在みることのできるタンカ形式のマンダラや壁画、あるいは砂マンダラなども忠実にしたがう。

マンダラの形態に変遷があることは明らかにしたが、逆にマンダラの特徴として変わらなかったのは何であろうか。『金剛頂経』ではじめてあらわれ、その後の多数の文献がうけついで「四角で四門をそなえる」という定型句こそ、マンダラのもつ一貫したイメージであろう。定型句をふくまない『金剛頂経』以前の文献でも、例外はあるが、この特徴は規定され、とくに門があることはすべての文献にみられた。四角で四門をそなえていたのはマンダラの外周部ではなく楼閣である。そして、楼閣が「外のマンダラ」とよばれ、マンダラそのものとしてあつかわれている。

マンダラが四角い形態をもち、四方に門を開いている理由は何か。ひとつはマンダラの原型がスメール山頂の王城に範をとったことがあげられるであろう。スメール山の頂上は、『俱舍論』などによれば一辺八万由旬の正方形である（定方 1973:15）。スメール山全体は、われわれが「山」という語から想像する末広がりの円錐形ではなく、縦長の直方体である。その山頂におかれた帝釈天の居城もやはり正方形で、四方には門が開い

ている。アバヤーカラグプタはマンダラの外周部を、世界のいちばん外側を取り巻く鉄囲輪とみなしている。外周部を含め、マンダラの全体像がスメール山を中心としたインド的宇宙観に根ざしていることは、マンダラ儀軌の制作者にもじゅうぶん意識されていた。

四角で四門という形態のモデルは、スメール山頂の王城という理想の都市に求めなくても、現実に存在する都市に一致する形態である。『マハーバーラタ』(1, 3, 4)には都市が門、門扉、トーラナをそなえているという記述がある (Acharya 1978: 283)。また正方形の、いわば入れ子式の城郭が都市を形づくっている形態は、とくに南インドの都市にしばしばみられる (ミッチェル 1993: 209-214)。その場合、四方には門が開かれ、その上にはトーラナがそびえている。

あるいはマンダラが寺院や神殿にかさなるイメージをそなえていたとも考えられる。楼閣の中にある内陣は『金剛頂経』では「内側の都城」とよばれたが、『ヴァジュラーヴァリー』などでは「ガルバマンダラ」(garbhamandala)「ガルバプタ」(garbhaputa) という名称でよばれることもある⁽²¹⁾。これはヒンドゥー寺院の内陣である「ガルバグリハ」(garbhgriha) という語を想起させる。さらには、すでに述べたように楼閣が「家」として意識されているケースも『ヴァジュラーヴァリー』には存在した。

都市も、神殿も、家も、宗教学的な文脈では、すべてコスモスをかたどった「聖なる空間」である。スメール山を中心とした宇宙全体に対応する外周部がかりに存在しなくても、楼閣自体が「宇宙の縮図」として意識されていたから、この部分のみを指して「マンダラ」とよぶことが可能なのであろう。

これまで述べてきたことは、マンダラの構造が「宇宙の縮図」であるという従来の考え方から出るものではない。そこでつぎに少し視点を変えて、儀礼とのかかわりの中でマンダラの形態が意味することを考えてみよう。

う。

マンダラが実際に制作されるのは、それ自体が目的ではなく、アビシェーカやプラティシユターをそのあとで行うためであり、儀式の準備段階に相当する。マンダラが門をもつということはこれらの後続の儀式と関係する。

アビシェーカという儀礼は複雑なプロセスをもつが、基本的には弟子がマンダラの諸尊によって聖別を受け、仏の位につくという構図をもつ。そのためには弟子はマンダラの諸尊の世界、すなわちマンダラの内部に入らなければならない。アビシェーカの儀式をはじめ直前の段階で、師は弟子をつれてマンダラの周囲をまわり、マンダラの四方の門に開門を宣言する。²²これによって神々の世界との回路が開かれたことになる。

プラティシユターの場合、マンダラの東側に沐浴の台 (śānaveḍi) を作り、その上にプラティシユターの対象となる尊像などを安置する。プラティシユターも基本的には、マンダラの尊格がプラティシユターの対象を聖別するという、アビシェーカと同じ構図の儀礼である。しかも聖別の中心となる各プロセスにはアビシェーカと同じ名称が用いられる (森 1995)。尊像などをおく沐浴の台は、一辺四ハスタ、高さ二ハスタ、あるいはその二倍もしくは半分の大きさをもった土壇で、四方と四隅に八つの瓶がおかれる。表面には牛糞や牛尿などの牛の五種の生産物 (pañcagavya) が塗られ、中央には二重蓮華を描く。そしてその周囲に、西に門を開いた四角い枠、あるいはトーラナはないが門を西に開いた正方形、さらに手のこんだものとしては、四角で四門をそなえた正方形を描く。この沐浴の台は名称は「ヴェーデー」であるが、形態的にはマンダラと変わりがなく²³。そして注目されるのは、どんなに簡略な場合でも、西に向けて少なくともひとつは門がつけられていることである。門が開く西の方角にはすでに神々の住むマンダラが描かれている。マンダラの諸尊による聖別

を受けるための通路の役割を、門はたしているのである。

ところで、実際に描かれたマンダラの楼閣はまわりがすべて囲まれ、どこも開かれていない。しかし、これは立体的な構造をもつ楼閣を平面的に描いたためであって、門扉は楼閣の周壁に対してつねに垂直に位置し、「開いた」状態を示している。そして門扉はマンダラの門の要素としてもっとも初期の文献から言及され、「亞」字に似た形を作ってきたと考えられる。

「門が開いている」という状態で描かれているのは何を表しているのか。シンボルとしての門はふたつの世界の境界を意味し、その門が開かれているのは、一方の世界からもう一方の世界への移行が可能であることを示している。そして、しばしばふたつの世界とは生と死の世界を象徴する（フリース 1984: 276、クーパー 1992: 112）。イニシエーションをはじめとする通過儀礼で門が重要な役割を果たすのはこのためである（ファン・ヘネップ 1977: 13-20）。マンダラの内陣が「ガルバ」すなわち母胎とよばれ、母胎のシンボルである蓮華が描かれることは、死、そして再生のプロセスと、門の開いたマンダラの形態が密接に結びついていることを示している。⁽²⁴⁾ マンダラは「閉じられた」コスモスであると同時に、選ばれて聖別されるものたちにとっては「開かれた」空間なのである。

註

(1) たとえば立川 (1989)、頼富 (1991)。

(2) 『ヴァジュラーヴァリー』はサンस्क리트写本が現存するが、校訂テキストは刊行されていない。ここでは、現存する写本から筆者が校訂したエディション（未完）を用いた。またチベット訳テキストとして、北京、デルゲ、ナルタンの三版を参照した。これらについては森 (1991) を参照。『ヴァジュラーヴァリー』の該当箇所は、便宜上、影印版西蔵大

- 藏経北京版 (TTP) のチベット訳テキストの頁、葉で指示した。99.4 は TTP 第八〇卷第九頁第四葉を示す。
- (3) ナーガブッティの著作は『マンダラ儀軌二十』(TTP, No. 2675)。他に『アビターナ・ウッタラタントラ』(TTP, No. 17) 『サンブタ・タントラ』(TTP, No. 26) からの引用をあげた。
- (4) 『金剛頂経』にも「マンダラを布に描け」という記述が登場する(堀内 1983: 308)。
- (5) ジュニャーナダーキニー・マンダラは『ヴァジュラーヴァリー』の中の二六種類のマンダラの第四番目に説明される。したがって「これ以降のマンダラ」とは、第五番目以降のマンダラをさす。
- (6) マンダラの構造上のパターンは石田 (1994: 23) 頼富 (1991: 45-49) に示されている。このでの分類もその域を出るものではない。
- (7) サンヴァラ・マンダラの構造については、かつて拙稿の中でくわしく述べたことがある(森 1993)。
- (8) 異読として「方広有四門」というテキストもある。
- (9) サンスクリット・テキストは堀内 (1983: 110-111)。漢訳は大正蔵第一八卷二七頁上、二五二頁中、二三九頁下である。ただし最後の金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』はサンスクリット・テキストの全文には対応しない。
- (10) 九仏頂マンダラについては田中 (1987: 174-175) 参照。
- (11) テキストは Skorupski (1983: 311)。その部分には Wayman (1973: 92-93) にも言及されている。
- (12) Wayman (1973: 83-84) はチベット訳テキスト (TTP, No. 114) を用いて、該当部分の翻訳を行っている。
- (13) おそらく原語は *bhiti* であるが、実際にどの部分を指すかは不明。『ヴァジュラーヴァリー』には「ラジヤスのピッテ」という語があらわれ、この場合は楼閣の周壁の内側を指していると考えられる。
- (14) 椀尾 (1927: 33) は楼閣の外側の外周部と理解している。
- (15) サンスクリット・テキストは Poussin (1896: 2)。¹⁾ チベット訳は TTP, No. 4788, Vol. 85, 273, 3, 5-8。翻訳は酒井 (1956: 53)。²⁾ Wayman (1973: 85-86) に *paṅka* とある。
- (16) Poussin のテキストでは第四偈第二 *pa* を *yakṣi* と読むが、*paṅka* が適当であると Wayman (1973: 86) も同様の修玉を *paṅka*。
- (17) TTP, Vol. 65, 39, 5, 8-41, 12。第一偈第四句から第二偈第三句までのをのぞいて『ヴァジュラーヴァリー』に引用された (94, 2)。³⁾ 括弧内のサンスクリットは『ヴァジュラーヴァリー』の引用文による。
- (18) 該当箇所は Vol. 65, 161, 3, 8-4, 2。

- (19) 外周部と鉄圍輪に関しては森 (1992b: 83-84) 参照。
- (20) 該当箇所は Vol. 80, 125, 3. 「マンダラの家屋」については森 (1994: 184-185) 参照。
- (21) 『ヴァジュラーヴァリー』では 94, 4, 105, 1 など。「ガルバプタ」は「サータナ・パーラー」(Sathananala) の第九七番「金剛ターラー成就法」にもふくまれる (立川 1986: 78)。
- (22) 『ヴァジュラーヴァリー』では「マンダラの成就の儀軌」にふくまれる (108, 2)。
- (23) 「ヴェーデー」の語はマンダラの樓閣の外壁の層のひとつとしても用いられている。高田 (1970: 4) で言及される「灌頂のためのマンダラ」は、この沐浴の台に相当するのであろう。ただし灌頂のマンダラは「大三昧耶マンダラ」の西に描かれるため、こことは方向が逆である。
- (24) 樓閣のもこのような象徴的な意味を考えると、Kūṭāgāra に「樓閣」という訳語を用いることは適切ではないかもしれない。Kūṭāgāra については古くは Vreese (1947) の小論があるが、近年 Bollee (1989) によって提唱された解釈が興味深い。それによれば、本来 Kūṭāgāra は森の中に建てられたイニシエーション用の建造物であるという。

略号表

T.P.: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition (『影印版北京版西蔵大蔵経』鈴木学術財団)

大正蔵: 大正新脩大蔵経

引用文献

- 石田尚豊 1984 『曼荼羅の見方—パターン認識—』岩波書店。
- 大山仁快 1961 『密教修法壇 (maṅḍala) の成立史について』『印度学仏教学研究』9(2): 236-239。
- クーパー, J. C. 1992 『世界シンボル事典』岩崎宗治・鈴木繁夫訳、三省堂。
- 酒井真典 1956 『チベット密教教理の研究』高野山出版社。
- 1970 『曼荼羅の基本的理解—ブツダグフヤの曼荼羅法略撰—』『酒井真典著作集 第一巻』法蔵館 pp. 271-292。
- 1971 『マンダラの墨打法について』『智山学報』(芙蓉良順博士古稀記念密教文化論集) 19: 49-71。
- 定方 晟 1973 『須弥山と極楽』(講談社現代新書) 講談社。
- 高田仁寛 1970 『曼荼羅の通則について』『高野山大学論叢』5: 1-29。

- 立川武蔵 1986 『金剛ターラーの観想法』『論叢仏教美術史』（町田甲一先生古稀記念会編）吉川弘文館、pp. 65-97.
- 1989 『マンタラー構造と機能—』『岩波講座東洋思想 第一〇巻インド仏教 三』岩波書店、pp. 289-314.
- 田中公明 1987 『曼荼羅イコノロジー』平河出版社。
- 梅尾祥雲 1927 『曼荼羅乃研究』高野山大学出版部。
- ファン・ヘネップ、A. 1977 『通過儀礼』綾部恒雄、綾部裕子訳、弘文堂。
- フリース、A. D. 1984 『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店。
- 堀内寛仁 1983 『初会金剛頂経の研究』（上）高野山大学密教文化研究所。
- 密教聖典研究会 1987 『Vajradhātumahāmandalopāyikā—Sarvavajodaya—梵文テキストと和訳—（Ⅱ）完』『大正大学総合仏教研究所年報』9:13-85.
- ミッチェル、G. 1993 『コンドラー教の建築』神谷武夫訳、鹿島出版会。
- 森 雅秀 1991 『インド密教における建築儀礼—Vajrauli-nāma-mandalopāyikā 和訳（一）—』『名古屋大学文学部研究論集』111:53-73.
- 1992a 『ヴァジララーブアリー』と『マンタラ儀軌四百五十頌』『印度学仏教学研究』40(2):188-191.
- 1992b 『観想上のマンタラと儀礼のためのマンタラ』『日本仏教学会年報』57:73-90.
- 1993 『サンブアラマンタラの図像学的考察』『曼荼羅と輪廻』（立川武蔵編）佼成出版社、pp. 206-234.
- 1994 『インド密教におけるハリ儀礼』『高野山大学密教文化研究所紀要』8:174-204.
- 1995 『インド後期密教の儀礼文献の構成』『南アジア、東南アジアにおける宗教、儀礼、社会—「正当」モデルの波及・形成と変容』（石井溥編、アジア・アフリカ言語文化研究所、pp. 19-34.
- 頼富本宏 1991 『曼荼羅鑑賞の基礎知識』至文堂。
- Acharya, P. K. 1978 (1927) *A Dictionary of Hindu Architecture: Treating of Sanskrit Architectural Terms with Illustrative Quotations from Śiṣoṣṣṭra, General Literature and Archaeological Records*. Bhopal: J. K. Publishing House.
- Bolleé, W. B. 1989 *The Kūtāgāra of from Men's House to Mansion in Eastern India and South-East Asia*. In A. L. Dallapiccola ed. *Śaśtric Traditions in Indian Arts*. Stuttgart: Steiner Verlag Wiesbaden, pp. 143-149.
- Matsuanaga Yūkei 1978 *The Gahvasanājā Tantra, A New Critical Edition*. Osaka: Toho Shuppan.

- Poussin, de la Vallée 1896 *Pañcatantra*. Gand : Université de Gand.
- Skorupski, T. 1983 *The Sarvadurgatiparisodhana Tantra : Elimination of All Evil Destinies*. Delhi : Motilal Banarsidass.
- Snellgrove, D. L. 1959 *The Hevajra Tantra*, 2 parts. London : Oxford University Press.
- Tsuda Shinichi 1974 *The Samvara-dya-tantra, Selected Chapters*. Tokyo : Hokuseido.
- Vreese, K. de 1947 *Skt. Kūṭāgāra. In India Antiqua*. Leiden : Brill, pp. 323-325.
- Wayman, A. 1973 *The Buddhist Tantras, Light on Indo-Tibetan Esotericism*. New York : Samuel Weiser.

付記

国立民族学博物館におけるシンポジウムでは、参加された方々からさまざまな意見が指摘をいただいた。とくに田中公明氏（東方研究会）からは、外周輪のないマンダラや、「亞」字形の門をふくむ作例が敦煌から報告されていることを、また宮治昭氏（名古屋大学教授）からは、バーミヤンの石窟に金剛杵によって周囲をかこまれた彌勒の壁画があることを、それぞれ教示いただいた。記して謝意を表します。